

林 大 だ よ り



第 71 号 平成 28 年 3 月 11 日

長野県林業大学校翌協会



1 学 年 樹木学実習 (上松町赤沢自然休養林)



2 学年 樹木医学実習 (木祖村)



木 望 祭 (寮祭)

原点のなりわいに就く若者達へ

翌松会 会長 富澤 博之



いきなり私事で恐縮ですが、今年で大工を生業として二十五年、独立して二十年になります。

果たして自分は何者で、どのように生きていったらよいのだろうかと思ひ悩み、ズルズルと他人より長い学生生活を送った後、たどり着いたのがこの道でした。

私が就職した工務店は、住宅や店舗の工事をこなす、ごくごく一般的ところで、入社した頃、それまで大工が自ら墨つけし、手刻みするという従来のスタイルから、「プレカット」業者にそうした部分を外注するスタイルに切り替わる時期にあたっていました。

自分が大工を目指した理由に、何も加工されていない材木を加工し組み合わせていく

ことによってモノを造り上げる、その無から有を生み出す作業にこの上ない魅力とやりがいを感じていたということがあります。

その最初の肝心な部分に携わることができぬストレスは日増しにつのり、ついには工務店をやめ独立するしか道はないと思うに至ったのです。

今思えば若気の至りとは思えぬ行動なのですが、当時の自分にはそれしか選択肢が見つかりませんでした。

独立したての若造に家づくりの一切を任せてくれる方などそうはおらず、ちよつとした改造や家具作りなどでなんとか生計をたてていましたが、そんな自分に二十坪ほどの住宅を依頼してくださる方が現れ、その後なんとか今まで暮らしてることができました。

そんな思いで仕事を続けてきましたので、構造部材はできるだけ隠さずありのまま見せる、そして内装も木を多用していくことを心がけていま

す。

今はとかく数値によって住宅性能が評価されていますが、それとは一線を画したこうした家で暮らしていると、不思議に心が落ち着き穏やかな気持ちになれることを実感しています。

この大切な素材を作り出してくれる仕事を、多くの林大生が目指していると聞きしています。

上棟式などの宴席で一番上座に座るのは仙人であることは（なかなか今ではそういう機会も少なくなりましたが）、その仕事がいかに尊ばれているのかを物語っているといえるでしょう。

実際の現場では自分の思い描いていたこととは違うことも多々あると思います。肉体的にも辛く投げ出してしまいたいこともあるかもしれません。それでもそんな時、この仕事は我々人間が暮らしていくためにはなくてはならぬ、替えのきかぬ大切な仕事だということ、どうか思い出ししてください。我々大工にとっても大切なパートナーです。一緒にタッグを組んで日本の家づくりを再構築していこうではありませんか。

三林大交流協定の締結に寄せて

長野県林業大学校 校長 宮崎 広雄



昨年の十一月十四日、本校と岐阜県立森林文化アカデミー、京都府立林業大学の三者で、『交流に関する基本協定』を締結いたしました。

協定は、森林資源が充実し、森林・林業再生が叫ばれる昨今、林業技術者育成のニーズが高まる中で三者が相互の交流を通じ技術者養成教育の充実・向上を図ることを目的としたものです。

これまでも、岐阜アカデミーと森林機械学実習や講義、京都林大とは特別講義などの聴講等で交流を図って参りましたが、交流をカリキュラムの中に位置づけ、さらに交流を深めるため、担当者の骨折りで協定締結にこぎ着けたものです。

締結式は、岐阜アカデミーの学校祭にあわせ、学生の見

守る中、涌井史郎学長と只木良也学長のお二方と机を並べてサインを交わしました。お二方は、国内外に知られた著名人であり大変緊張をしたところでした。

最近、各県で林業大学校を創立する動きが顕著です。平成二十七年、新たに高知県、秋田県で林業大学校が設立されたほか、今後も幾つかの県等で計画されています。

こうした中、老舗ともいえる本校はこの協定のもと三校で協働するとともに、それぞれの持ち味を生かしながら、林業大学校の魁としてさらなる発展を期したいものです。

協定式の翌日、第二回となった三林大の技術競技会が開催されました。ソーチェーの張り替えや、合わせ切り、伐倒方向の正確さ等を競うものです。

昨年は三位に甘んじたところですが、本年度は、一位の岐阜アカデミーに及ばなかったものの、二位を獲得することができました。競技を通じ

三校の学生がそれぞれ技術を競い、讃えあう中で大いに交流が図られたものと思います。

このため、この技術競技会は、三校の交流事業の一つとして、今後も継承してまいります。来年二十八年度の開催を本学が担当することになっておりますので、早い時期か

ら準備を行い、本学ならではの学びの場、学生が楽しく交流できる競技会にしたいと考えています。

三者協定等、様々な機会を捉え、外に向かい開かれた学校運営に努めて参りますので、今後とも温かい御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

いつか調査先で

信州大学農学部 助教 三木 敦朗



もよくなりません。イノベーションもありえないでしょう。日々あれこれ考えてほしい。

アイデア、つまり「楽しいくわだて」「ついニヤニヤしてしまいたくらし」を、いつも持っていてほしい。みなさんに期待したいことです。

森林・林業、環境、山村のどの分野でも、かかえる課題は一朝一夕に解決しがたい。特効薬的なものはないし、安易に飛びついていけない。でも「いつちよ私が変わってやろう」と思わなかったら、何

私たちの前には様々な課題があつて、頭を悩ませるわけですが、アイデアはあくまで愉快に考えたい。眉間にしわを寄せてひねり出した悲壮感だようやつは、他の人の協力を得にくいからです。

「なんかヤバそう」なもののが、力がわいてきやすい。「なにを变なことを」と言われるかもしれないけれども、そういう考えをぬけぬけと言っても許されるのが、若い人（私も含めて）の特権で

す。

いいアイデアは、しかし荒唐無稽なこととは違う。観察の中から生まれてくるものです。逆にいえば、何か面白いことをやってやろうと思うから、目や耳に入ってくるものが情報になるのだし、読んだ本からヒントも得られる。若いうちは、知らないことを「知らないで教えて」と言っても平気だし。

そして、思いつきを人に話して、アイデアを実現する仲間をつくってほしい。

いつか調査先でみなさんに出会ったとき、「いま、ちよつと面白いこと考えてるんですよ」「こんな新しいことをやってみています」という話を聞いて、一緒にニヤリとする——それを楽しみにしています。



『林大生ありがとう。』

（株）加藤組 代表取締役 加藤 晋悟



まず第一声はこの題名のとおり、お礼を言いたいです。林業大学の皆さん、ありがとうございます!!。

木曽の地域を活性化させようと我々が行っている木曽のイベント「雪灯りの散歩路」、木曽の手仕事市」等では私達の目的とする、「まずイベントを楽しみ、また、来客される方々にも喜んで貰う」こんな目標にむかつて一緒に準備をし、楽しみ、接客をしてくれました。

おかげで、来場者も増えつつ有り、この地域の活性化につながってきています。

これらのイベントで一緒に行動していて、皆さんの明るさ、そして不言実行的な行動、とにかく動いてくれる、そんな皆さんに、私の仲間もみんな好感を持って接するこ

とが出来たし、私達も皆さんとのとても良い思い出ができたことに感謝をしています。

皆さんを送り出すにあたって一言。これからの人生においての助言になればと思ひ書きました。それはもっと良い意味での自己アピールをしてほしい、もっとチャレンジの気持ちを持って行動してほしい。おとなしく黙々と働くという日本人らしい良いところは、皆さんは十分に持っているのは分かりました。

でも、皆さんには、これから世の中へ出ていったときには、自分の感性に従って何かやってみたい!と思ったときには、やってみてほしい。

結果はどうなるか分からないけど、それでも後で行動すれば良かったと悔いが残るよりは行動して反省、更に進む!そんな人生を送っていたきたいですね。

私も今までそうして色々なことを行ってきたつもりです。

いろいろなことを行ったこ

学生のページ

あすなるの呟

つぶやき

学校・寮生活から

とも満足しているし、そこで知り合うことが出来た仲間達も私の宝だと思っています。そんな宝を皆さんも沢山作りながらいろんな分野でご活躍

してください。
そしていつでも木曽へ遊びに、疲れたら癒やされに、帰ってきてください。

辛いことと楽しいことの日々



1 学年
上野 由希菜

林大へ入学してから、早くも一年が過ぎようとしています。この一年間は、初めての寮生活や難しい教養科目や林業専門科目の授業など、正直毎日が大変でした。しかし、そんなに辛いことばかりではありませんでした。親のように接してくれる先生、毎日美味しい食事を一生懸命作ってくれる寮母さん、色々なアドバイスしてくれる優しい先輩、そしてどんなに辛い時で

も一緒に乗り越えてきた楽しい仲間、そんな方々のおかげで楽しく過ごすことができました。正直、二年間の林大生活を終え社会へと飛び出す先輩とお別れするのはとても寂しいです。就職しても林大に遊びに来てください!! 心よりお待ちしております。そして一年から二年となり、これからは将来のことを考え、自分でしっかりと決めていく時期になります。今の自分に足りないことや、これまで学んだことを生かして、残りの林大生活を悔いなく有意義に過ごしていきたいと思っています。



林大に入学して だいたい一年



1 学年
児玉 月之助

僕は林大に入学したてのころ、とても不安でした。親しい友人もいない、親も兄弟もいない、勉強にはついていけないのかとずっと考えていました。しかし、そんなことは心配無用でした。先輩はとても優しくなんでも教えてくれ、

同期の人たちは陽気ですぐ仲良くなりました。先生がたには、いつも迷惑をかけていますが、いつも手取り足取りしっかりと教えてくれます。今はもう不安はありません。来年は後輩ができ、自分の将来を決める就職があります。先輩方にしてもらったように後輩に接し、楽しくするときには楽しくし、怒るときにはしっかりと怒れる、そんなよき先輩になりたいです。そして就職もきっちりと決め、有終の美を飾るため、走っていく最後の一年にします。

あつという間の一年目



1 学年
中畑 量平

私が林大に入学して、一年経とうとしている。一日一日があつという間に過ぎていき、一年はとも早かったと感じている。ちょうど一年前、私は林大の一般入試を受けた。倍率が高く、なぜ私が受かったのか今でもよくわか



1 学年 樹木学実習（木曽町）



1 学年 化学（化学生物教室）



1 学年 苗畑実習（山形村）

寮生活は当初は不安で集団生活に慣れるか、夜眠れるのかも、心配でした。

らない。入学してから月日の経過はとても早かった。冬休みから始めたのが、毎日どんなことをやったのか記録することである。これにより前に比べて、一日に重みが増した気がする。今後もこれを継続していきたい。そして、四月になったら自分は二年になり、新入生が入学してくる。現在、二年の先輩方のようになれるか不安という気持ちとともに、二年の授業がとても楽しみである。できるだけ多くの知識や技術を吸収していきたい。

私は大学への進学希望であるが、最後まであきらめることなく勉強を継続することが大切だと思う。今後は今まで以上に真剣に取り組むことが合格を勝ちとるためには必要だと思うので、身を入れて勉学に取り組みたい。

私が林業大学校に入学してあつという間に一年が経ちました。そんな一年間を振り返ってみると、授業では造林学や治山工学などで多くの実習があり、治山の現場や採種園の見学、苗畑の実習をさせてもらいました。初めて知ることが多く、充実していたように感じます。実習をするなかで、檜皮葺や柿葺などの伝統文化の見学をしてからは、普段ならなんとなく見ていた木造建築も見方が変わり、建物の屋根などを見たり気になったりするようにになりました。



1 学年 樋口 諒輔

「二年を振り返って」



1 学年 林業機械学実習（木曽町）

が先輩方は優しく、寮での決まりを教えてください、わからないことを質問すると丁寧に答えてくれたので案外眠れました。

寮生活ではみんなで課題やテスト勉強、悩みの相談などよく協力することが多く、なんだかんだで毎日楽しいです。

四月からは二年生になるので先輩達みたいになれるように今から気を引き締めていきたいです。そして先輩風をビュービュー吹かせていきたいです！



1 学年 三石 太希

仲間が語り、学ぶ

林大に入学し、森林・林業に関する様々なことを一年間学んだ。授業や実習、研修だけでなく、学校の仲間から知識・技術を得ることもかなり多かった。というのも、仲間達は各々が得意とする分野を持っていくからだ。例えば、林業機械についてよく知る人、木材利用に詳しい人、その他に施業やマツ枯れ等々、それぞれが熱く語ることでできる分野がある。かく言う私も、野生鳥獣やその被害対策に関することであれば他人より語ることができる。授業では分からなかったことや、興味



1 学年 測量学（製図室）

を持ったことについて、その道に詳しい仲間に関ければ理解もしやすく、さらに新たな知識を得ることもできる。これは何も森林・林業に関することだけでなく、車のこととか、スポーツのことだとか、実に様々なことを仲間から教わることは面白い。

それぞれの知識や経験とといったことが個性として光り、語り合える林大での生活は、中々充実している。そして、来年度の後輩から、それぞれの語りが聞けることを楽しみにしている。

「糧」



2 学年
小山 若菜

林大生活を振り返ると、多くの出会いと発見に恵まれた二年間だったと思います。実習や講義を通し出会った講師の先生方、インターンシップ先で出会った方々を通して、森林に対する多様な考え



2 学年
授業風景(教室)

方を知り、将来、自分自身何を目指すかなければならないのか真剣に考えることが出来ました。また、初めて実家から離れて生活することで、家族の尊さ、地元の良さを再発見することが出来ました。そして、多くの企業や現場を見ることで改めて林業の奥深さや難しさ、様々な森林の姿を知ることが出来ました。

長い人生のたった二年間。でもその二年間で得た全てのことが、これからの人生の大きな「糧」になると思っています。林大に出会えて本当に良かったです。ありがとうございました。

『ありがとう』



2 学年
佐藤 秀和

私は林大に入学するまで、自分の意思を持たず流されてきました。特に自分のやりたいことは無く親や学校の先生など、大人に言われたことを鵜呑みにし、自分の意思を持たず流され、気付いたら十八歳でした。

そんな私が林大へ入学してまもなく二年が経ち、もうすぐ卒業です。この二年間を振り返ると、大事な決めごとでは常に自分の意思を持つことができていました。私が変わることが出来たのは、林大で多くの人と関わることが出来たからです。ありがとうございました。

私は、良き先輩・後輩・同級生に巡りあえた林大が大好きです。林大で過ごした二年間は私にとって、一生の宝物です。

そんな大好きな林大生活も残りわずか。私達は皆、春か

2 学年

上松技術専門学校
上條校長特別講義
(実習室)



これから



2 学年
武田 菜那

私は、二年前、初めての寮生活に不安と期待を抱えながら入寮日を迎えました。あれから様々な時間を仲間とともに過ごした林大生活を振り返ると、とても濃くあつという間のものでした。

屋久島研修やオーストリア研修、御嶽での実習など授業でも多くのことを経験できましたが、特に印象深いのは寮生活です。

一年生のとき、会話中に誰かが「林大生は家族だ」と言っていました。同級生だけでなく、先輩、後輩とも今までに無いくらい距離が近く、楽しいことも辛いことも多くの時間を共有してきました。そのなかで、お互いのことを知り、ともに成長してることが出来ました。だからこそ、「友人」ではなく、「家族」とその人は例えたと思います。そして、「これから

林大生活で印象に残っていることは林大の特徴でもある全寮制での二年間の寮生活です。私は初めての寮生活で、不安でいっぱいでしたが、やさしい先輩方や個性溢れる三十六期生、愉快な後輩たち、先生方、家族に支えられながら充実した学生生活を送ることが出来ました。

屋久島研修、地域行事、海外研修、寮祭と様々な行事があったことで、勉強になったこと



2学年 校外研修（信州大学演習林 伊那市）



2学年 丸山 涼弥

笑顔だけで

ずっと関わって「いこう」という願いがあったのではないのでしょうか。

これからは、それぞれの夢に向かって旅立ちますが、ここでお別れではなく、また集まって笑い合えれば嬉しいです。

や、楽しかったことがありました。授業が終わり寮に帰れば、誰かが騒いでたり、笑ったり、楽しんだり、悲しんだり、時には真剣な話をした何気ない一日を送った寮生活のほうが私は何よりも楽しく、好きでした。

皆さんの支えが無ければこの二年間を楽しく過ごすことが出来ませんでした。また、皆さんのおかげで一步踏み出すことが出来た私がいいます。小学、中学、高校、林大と学生生活を送ってきましたが、私は人間関係に恵まれていると改めて思います。

楽しい日々をありがとう！

あつという間な二年間



2学年 和田 優哉

最後の学校生活がついに終わりを迎えます。長いようでとても短かった林大での二年間、寮生活が終わります。

自分はあまり社交的とは言えない性格だと思っていいます。コミュニケーション力も他のみんなに比べたら下の



2学年 森林気象学（岐阜県 チャオ御嶽スキー場）

時には意見の食い違いから口論をしたりと色々ありました。でもみんなで何かするといった時の団結力はすごかったと思います。

この林大での生活は自分にとってとても大きな財産になりました。決して忘れることができないものになったと思っています。

最後に、先生方や三十六期のみんなのおかげで二年間の学校生活を楽しく送ることができました、本当にありがとうございます！これからも仲良くしてください！

下くらいでしょう。そんな自分が寮生活という集団生活で生きていけるかと初めは心配でした。ですが生活してみるととても楽しく、とても居心地のいい場所でした。

自分の代はみんな個性が強く、面白いやつばかりでした。そんなみんなとバカやったり、



実習棟に薪ストーブが設置されました。

学生には里山資源の有効活用に関心を高めてもらい、大いに勉学に励んでいただきたいと思います。



おしらせ

保護者の
ページ絵
の
一
言

「次世代への思い」

小口 秀樹



林大での生活も今年の春を迎えると早々一年となりますが、学校での授業や、実習、更に親元を離れての初めての寮生活では今まで体験したことのない充実した日々が送れたことだろうと確信しています。この二年間で

り返し、酸性雨の被害により多くの森林破壊を引き起こすことは免れない事実であります。数十年後、数百年後のまだ見ぬ子供達の為に何かしなければいけません。その為に今林大で学んでいる若い人達が必ず必要となることでしょう。結果はすぐには出ませんが、その日の為に今はコツコツ頑張って次世代に繋げて欲しいです。

学ぶこと、培った技能、知識、資格、そして知り合った仲間をどうか大切にしてい残りの学校生活を悔いなく有意義に過ごして欲しいと思います。林大は自分で選んだ将来への第一歩。自分を信じて頑張ってください。あと残念なことに、この先の地球は温暖化が急激に進行し、異常気象を繰



上松技術専門校とのスポーツ交流

これからの林大生

多田 豊



林業大学の先生や寮母さんとお話になつております。当方も建設業に携わつていて林業作業を少々知つていた為、作業内容的にも厳しい事を記憶している中で、息子が耐えられるのか？嫌になつてしまふのではないかと考えてしまひ、皆様にご迷惑をかけてしまわなにか心配してました。しかし、皆様のご指導がとても良く九ヶ月もの日々を過ごせる事が出来ました。本当に有難う御座います。

現在の日本は、自然エネルギーを促進している中で、バイオマス発電などは間伐材をチップにして二十四時間発電を行う事業など盛んです。山に関しても、人の手が入らない山が増えてしまつて、木が密集してしまひ間伐などを行わなければ山としての機能を生かせていない為、土砂崩れなど起きてしまいます。山は

自然のダムとまで言われる事がある中で、林大はとても大事な役割を持つていてと感じ

これまでと
これから

野本 葉月



三年程前に「人生一度きりなら社会的意義のある林業を営みたい」と言つたのは私の母でした。けれどそれは表紙一枚の起業プランで、話が進展することもないままでした。

夫に出会つたのはその後で、いつどのようになその話を伝えたかは忘れましたが、いくつか森林ボランティアに二人で参加していく中で、彼も林業に興味をもつたようでした。

その当時、夫はまだ久保田さんと呼ばれ製鉄業に従事する会社員でした。

それから一年、様々な進路から林大を選び、入学までの諸事を



登山部 木曾駒ヶ岳登山

一人で済ませ、学生となりました。安定した職を辞し、心許ないプランを基に林学の道に進んでくれたことに感謝しています。

現時点で家業としての林業への参入はハードルが高いことが分かりましたが、学ぶ程に奥深い林業。どのフィールドを選んでも彼なりに活躍してくれると思っています。学校生活のことはあまり語ってくれませんが、若い友達に野本さんと呼ばれることにはすっかり慣れたようです。

本間 久美子



林大に着くと二年生の先輩方に「一番最初だよ」と迎え入れられ、待つてましたとばかりに皆で荷物を運んでいただき、部屋まで案内してもらいました。とても親切で、嬉しかった事を覚えています。親元を離れ初めての寮生活で心配ではありましたが、共同生活の中で趣味や気の合う仲間が出来たようでした。安心してしま

木望祭では学習の様子や班の行動での事などが紹介され

ていたり、木曾ならではのイベントがあり、いつもと違った一面が見られて良かったと思います。

林大での実習、研修等、実践的な教育が将来の自分に繋がるよう学習に励んでもらいたいです。そして長野県の林業の発展に貢献できる一人として頑張って欲しいです。

先生方、林大の仲間の皆さん、地域の皆様感謝し、あと一年充実した日々を送れるよう願っています。

桐生 拓史



「林大に行かせて下さい」
生まれて初めて息子の口から
聞いた「勉強への意欲」とも
取れるこの言葉に、危うく淡

から、息子は林大での日々を心から楽しんでいることが見て取れ、話を聞かされるこちらにも幸せな気持ちになれました。

これから社会に出る息子には、林大でご指導頂いた先生方や寮母さん、「林大」への道を示して下さった下伊那農業高校の先生方への感謝の気持ち忘れず、自覚と誇りを持つて地域と林業界で活躍することを、大いに期待しています。二年間本当にありがとうございました。

木曾の自然と
仲間たちに囲まれて



渡邊 紀夫

に自宅に居た時より食も良くなり、表情も生き生きとし、学校、寮での生活、友達や先輩の事、木曾での生活を楽しそうに話す息子を見て親として林大に入って本当に良かったと思っています。学校時間外でバイトをしたり、友達と色々な話をしたり、学校生活共々充実した時間を過ごしている事を感じています。寮は団体生活ですので規律を守り他人を思いやる気持ちを持って、林大ライフ、木曾で生活する二年間を仲間と一緒に楽しい思い出をたくさん作ってほしいと思います。文末になりましたが、先生方、寮関係者の皆様、ありがとうございます。これからもよろしく願います。

ト先で
お世話
になつ
たこと
等々。
反省の
色もな
く、と
ても嬉
しそう
に楽し
そうに
話す姿

「林大に感謝」



坂口穂高

息子が林大生になり、二年近く経ちました。研修中心のカリキュラムは、座学が苦手な息子にも林業という自然を相手にした学問への興味を最大限に引き出しつつ、厳しさも教えてくれていると感じました。同時に社会人との交流も出来て、学生が社会に踏み出す準備の為に良い学校に巡り合えたと感じています。

す。特に夏休み前後、研修に追われて時間が取れないと言いなながらも、はじめて本気でやった就職試験勉強の成果もでて、充実した一年だったと振り返ることが出来るのではないのでしょうか。全寮制のこの学校は、同じ方向を向いた同志と一緒に生活出来るまたとなない機会、良い環境で

良い仲間と生活出来ている事が、休みに帰ってきた息子の様子からも伺えます。今、春からの新社会人としての期待と不安の中、最後の寮生活を楽しんでいきたいと思います。二年間、良い環境を与えてくれた林業大学校と先生方のご尽力に改めて感謝しております。



ありがたう
ございました!!
中村 青豊

何気なく言ったことが、きっかけかどうかは知りませんが、その後、高校の先生に相談したり、先生から林業関連の本をお借りしたりと自分なりに大学のことをいろいろと調べていたようです。そして「親父、俺、林業大学校を受けてみたいんだけど」と高校三年になった彼はそう言い、受験し、合格させて頂き今に至ります。

早いもので今年の三月が来れば卒業です。先生方、先輩、友達、後輩…皆様、大変お世話になりました。おかげさまで息子も、ものすごく貴重な二年間を送ることができ感謝しております。ありがとうございました。皆様は、これからの息子の人生の中で、かけがえのない宝となること間違いなしです！

林業の未来を 担う君たちへ

高見澤 敏明



大学卒業を目前に社会に出るべく準備が始まり、一般企業の試験を受けながら多くを語らず悩む姿の息子が出した答えは林大進学でした。「全人教育」を実践されてきた貴校で二年間過ごさせて頂けたことに親として心より感謝申し上げます。現代社会においてスピードを競うかのような流れの速い業種が多い中、林業は非常に長い時間を必要とする業種です。戦後植林された木がやっと長い年月を経て伐期を迎え、また同時に次の

世代へのステージづくりを必要としています。国産材利用が時流となりつつある今、皆さんの実力を発揮できる場面は確実に増えていくことでしょう。林大で培った知識と経験に大いに期待しております。支援くださった県関係者の皆様、校長先生、担任の吉川教授、オーストリア研修をはじめご指導を頂いた学校関係者の皆様、寮の学友、木曽地域の皆様、そして毎日の健康を支えてくださった寮母さんに心より御礼申し上げます。

「充実した学生生活を送らせてもらっているんだなあ」昨年十月中旬、林大にて行われた「木望祭」に訪れた際、壁に貼ってある息子の写真を眺めてそう感じました。そしてそれは、外で焼き鳥を焼き、販売する息子の姿を見て更にそう感じました。写真を撮るといえば変顔をするあたり、血は争えないなああと…かくゆう私も昔は（今でこそやりませんが…）写真に写るといえば変顔をしていたものです（笑）。

思えば高校二年位の頃でし



中部森林技術交流発表会
（長野市）

たか、私が都会より自然が好きで息子が「林業大学校」に「林業大学校」の木曾にあるんだよ。」って

「翌檜から檜へ」

宮脇 利政



「すべて山の中」の風情を肌で感じながら車を走らせ、静かな佇まいの翌檜寮に到着し、玄関から入って階段を上り、二階廊下の左奥の四人部屋の床に荷物を降ろした日から早いもので二年の月日が経とうとしています。高校卒業後はその先の進むべき道に迷い、都会の雑踏の片隅で足踏みしていた頃に林大への進学を勧めたところ、その誘いに応じて自らの意思で林業の勉

強を始めた息子は、木曽谷の水と空気と人情が肌に合ったのか、日々の座学や実習、寮生活、研修旅行、木望祭、そして季節毎の地域行事への参加と、親から見てもそれまでとは別人のように生き生きと学生生活を謳歌していたようです。その間、トレーニング部顧問の前校長先生や担任の吉川先生を始め、教職員の皆様方には放課後の駅周辺での課外活動も含めて一方ならぬお世話になり、感謝に耐えられません。おかげ様で、二年間で培った林業に関する知識と技能が遺憾なく発揮できそうな職場への就職が内定し、四月から新たな生活に踏み出すことになりました。これからは社会の一員としての自覚と責任感を持って更に活躍して行ってくれることを願っています。

『アスナロ、
いつきまーす!!』34期
信州大学農学部4年
森谷 周平

今冬は年が明けても木曽では雪が積もらない。いよいよ冬まで温暖化してしまったようだ。私が林大にいた頃、土日などの職員の方がいない日に雪が降ると、起き出した人

三十六期林大生が
卒業を迎えるに当たって2学年担任
吉川 達也

私には、本当の娘が二人いて、下の娘は平成七年生まれ、まさしく三十六期林大生の大半が生まれた年と同じ年に当たる。その娘を育てていた時を振り返ると、確か小学校に入った時に完全週休二日制に移行し、小一から土日休みが当たり前で、「ゆとり教育」の恩恵や弊害を受けた年

から雪かきをしていた。私は朝が弱いので、その節は大変お世話になりました(笑)。ありがとう。

カラマツ製の机と椅子、寝る前に見上げたベッドの落書き、手足を放り出せる大きなお風呂、ときどき無性に食べなくなる中華飯、真っ黄色に映える中庭のカツラ、快活な笑い声、まだ二年しか経っていないのに林大の生活はとも懐かしい。

私は編入した信州大学で漆

檜の
アドバイス

代だ。しかも、その「ゆとり教育」も見直され、「ゆとり世代」の最後の年代が平成七年生まれと言われている。

ゆとりで育った自分の子供

と同じ年の学生の担任となるのも何かの縁だと思うが、「おたく」と呼ばれるほど、携帯(スマホ)いじりやゲームやコレクションなど、ゆとりの中で余った時間を、それらに費やして育ってきた学生と接するたび、いつも自分の子供とダブって見てしまった。学生達に指導するたび、「今これを言っても聞かねえだろうな」と半分あきらめかけて「こういう時代に育って

掻き職人の勉強をしている。漆掻きとは、ウルシの内樹皮にキズをつけ、防衛反応によって分泌される漆を採取する技術のことで、その歴史は縄文時代に遡る。戦後すぐまでは長野県でも漆生産をしていたが、今では一名の漆掻き職人しかいない。

漆掻き職人はひと夏の間に二十回前後ウルシの下へ通い、その都度キズを増やし、漆を集めている。漆生産のよ

うに季節に合わせた生業は、農山村ならではの多様な林産物を生み、日本らしい林業を築いてきた。そうした林産物を見直した多層的な林業の姿が国際競争の中で価値を持つこともあるだろう。

漆掻き職人の間では、十五年生のウルシで一本八百円から千五百円で取引されており、萌芽更新で再造林経費も節約できるため、遊休地があれば植えてみてはいいかがある。うか。

林業では今後十年、二十年でますます近代化が進む一方、人は少なく、木

は大きく、若い森は足りないといった課題が出てくるだろう。他にも自然環境や農山村社会など前提となる基盤にも変化があるだろうが、そんな頃に主力を担うのが今の新人世代である。

しまったからある程度仕方がないな」と自分の胸に手を当てながら、そう思ってしまう時もあった。

しかし、そんな三十六期生

は、林業の「おたく」でもあったので、それぞれに個性を感じて嬉しかったし、楽しかった。屋久島や御嶽山の登山中や移動のバスの中などいつも話し声・笑い声が絶えず、その会話を聞くと、やはり林業おたくと思えるマニアックな話。無口な奴もいたが、それも独特な個性を醸し出していて実に面白い。過去最高の人数と言われた「娘」たち六人もそれぞれの個性が

あって良かった。学年全体を明るくしてくれて、それぞれが個性を出す中で、一体感は常に持って、目指す方向に全員が前向きであったと思う。本当に感謝している。

この四月から、進学するもの、就職するものそれぞれの進路に向かうが、これだけは言っておきたい。

一つ目は、君たちが目指す林業の世界は、自然相手のとても厳しい世界であるということ。生半可な気持ちではダメで、強い覚悟を持って進学・就職してほしい。

二つ目は厳しい林業の世界ではあるが、それぞれの処に入って即戦力になろうと決し

て焦ってはいけない。林業の世界は怪我や危険が付きもので、ゆとりで育った君たちを受け入れてくれる処も、即戦力と最初から期待はしていないし、それより少しずつ確実に育ってくれることを期待しているはずだ。

要するに、強い気持ちを保持して臨んでほしいが、最初からあせらず、長いスパンで考えて、これから臨んでほしいということだ。

最後に、私も君たちと二年間過ごしてきた木曽、私もその木曽の人間です。木曽を第二のふるさとしてあることを思い返すたびに、木曽に帰ってきてほしい。卒業後も木曽で逢うことを楽しみにしている。

我 ら 林 大 生 !



第36回 卒業式

三林大交流協定調印式



協 定 書

三 林 大 生 勢 揃 い



編集後記

四月早々に、新入生が学校の裏の城山を登ることが恒例。登りきった所で、大声で決意を叫ぶ。「心機一転頑張る」と吹っ切るように言い切った者がいた。あれから二年。早いものだ。

この地で勤務している中で感じている、耳に聞こえてくる音・サウンドについての感想を三つ。

一つは地元の小学生が登校する際に聞こえてくる熊よけの熊鈴の音。二つ目は黄昏時、遠くから聞こえるチェンソーのエンジン音。三つ目はいつも聞こえてくる鳥のさえずり。いずれも心地いい。これらから思ったこと。それは、やはりこの地は「森林・林業」なのだ。

ここで生活した学生達も、それぞれに何かを感じて巣立って行くと思う。

送別にあたり、私が上司から頂戴した言葉を皆さんに贈りたい。

就職してから十数年経った頃の話。上司は言った。「逃げるな」とのひと事。当時の私は攻めるそぶりをしながら、逃げていた。明らかに見透かされていたのだ。上司は物静かに、そして丁寧話してくれた。鮮烈に心を突き刺し、忘れられない言葉となっている。

さて、ある時、いつかどこかで、皆が活躍している便りが聞こえてくる。そんなサウンドも心地いいかと思っています。卒業おめでとう。

(T)